日本の風景と景観照明[†]

富田泰行*

日本の風景は、明治以降の西洋文明の流入期と戦後の荒廃した状況からの早急な復興、そして高度経済成長期といった一連の流れの中で大きな変化を遂げてきた。屋外の照明もその変化と歩調を合わせるごとく発展してきた。機能的照明の発展は生活の利便性追求、高効率化の飽くなき追求でもあった。そして現在、景観照明はソフト化する都市環境において重要な位置づけがされるまでになった。このように光は市民権を得、時流にのった観もあるが、総体としての光環境はまだ黎明期であるといっても過言ではない。

1. 日本人と照明

人類はその昔、陽が上ると活動を始め日没と共に身を休めた。やがて人類は火を使うことを覚え、あらゆる用途の火を作り出してきた。照らしだす道具としての火は人類の生活に幅をもたせ、生産性の向上に有効な手段となってきた。それ以降、明るさを確保するための道具には様々な創意工夫がなされ、人々の生活形態を刷新する一翼を担ってきた。しかしながら、近代における電球の発明までは蛍の光でさえ明るく感じる程の明るさが限度であった。

昔のあかりは情緒があってよいといったことは、現代のあり余る程の光があってこそ言えることであって実は大変に不便であった筈である。だからこそ明るさへの様々な工夫に心血を注いできたのである。しかし、その工夫の根底には日本人独特の光と陰の微妙な変化や自然のうつろいを忘れてはいなかった。それは乏しい人工の光を補うため、建築や生活具には自然の光を巧みに活かし、且つ美しい佇まいを呈している。

日本は、戦後の復興の中で暗く長かった時代を払拭するかのごとく、白々と光る蛍光灯を是としてきた。これはとりも直さず明るさへの強い願望であって、否定する要因など微塵もなかった。これこそが「ものの豊かさ」という価値観そのものであった。こうした高度成長期の大きな潮流を認めた上で、近年そして現在へと豊かさの価値観は大きく変貌を遂げてきた。そのような状況の中で照明がクローズアップされるようになってきたのは、つい最近のことである。そして、その動向は屋内の照明は勿論のこと今まで

機能的重視とされてきた屋外の照明にも及び、さらに都市の景観形成の重要な要素として位置づけられるまでになってきた。

かつて人類は火を発見し、様々な用途へと展開させた行為は文明そのものであった。現在その火を大きく発展させ、人の心を映した都市景観へ寄与する存在までになった光はまさに文化であろう。

2. 都市照明のありよう

最近、ライトアップという言葉が日常的に使われるようになり、光はその時流にのった向きもあるが、照明を点けることすべてをライトアップと呼んでいるケースも見受けられ、どうも正確な理解がされていない場合もある。

「ライトアップ」を光環境創出の比喩的表現として使う場合と景観照明の1つの手法として使う場合では意味が違うことを、我々自身ももう一度再認識しておかなければならない。

(1) 都市照明の動向

照明が都市環境の中でウェートを占めるようになってきたのは、東京オリンピック以降の都市施設の充実、そして新たな試行が都市機能の24時間化による生活時間、空間の拡大と相俟って新展開を迎えたことに起因する。

言うまでもなく現在街づくり、場づくりの指針に光環境の考え方を導入することはめずらしくなくなってきており、個別の建造物においても夜のシーン作りに配慮することの重要性が理解されてきている。アメニティ性の高いライトスケープを形成していくことは、時代のニーズであり景観形成の重要なファクターである。

かつて、日本が直面した問題にオイルショックがある。当時、都市の夜空を染めていた建物の照明、看板、街路灯はエネルギーの枯渇の音が飛び交う中、実質的なエネルギーセーブというより目につき易いもの、精神性などの点から縮小せざるを得なかった。こうした状況は昨年の湾岸戦争の時にも同じような対応策がとられた。オイルショックの時とは違い、景観照明が声なき声により縮小を余儀なくされた。これはまだ景観照明が付加的な要素で、場合によっては無駄であるといった意識が少なからずあるため、海外の照明先進国の状況とはだいぶ違っているようだ。こういった意味から、日本の都市景観照明は黎明期であると言わざるを得ない。

(2) ライトスケープの考え方

[†] Landscape and Lightscape in Japan

* ㈱石井幹子デザイン事務所 Yasuyuki Tomita

〒102 東京都千代田区六番町6 若溪ビル

図1、光のマスタープラン

現在、我々をとりまく環境には天文学的な数ほどの光が存在している。屋内であれば限定された空間の限定された人々に対して提供される光となるが、屋外の場合はそうはいかない。様々な利害をもって存在する。

ライトスケープ形成の目的は心地よい光環境（光と陰のトータルバランス）を創り出すことであり、いままさに利害を越えてそれが求められる時代なのである。

光環境の創出には周到な光のマスタープラン作りが必要となる。その地域の風土、地形、街の成り立ち、慣習、生活形態の調査・分析を通して夜間景観のニーズを探る。この前提条件を受けてテーマの設定、ストーリー作りによりその地域らしさを設定する。光のマスタープランとは地域のゾーニング的な光の空間構成だけではなく、風土に根ざした地域イメージや光の質を求めることである。ものまね的にライトアップや光の演出を行うことは避けなければならない。深夜まで活動する都市部での手法をどこで街でもやろうとすれば必ず破綻がくる。また、運用面の検討も重要な要素である。日常の市民生活、催事などとりわけ地域の生活形態に適応した時間系のプランニングも必要となってくる。

3. 快適な光環境づくり

山の谷間で車のライトを消すと頭上に広がる満天の星空や徐々に慣れてきた暗さの中に、月明かりでほのかに浮かびあがるあの青い世界を我々は知っている。また、坂を登りつめた山の上から扇状に広がる宝石を散りばめたようなすばらしい都市の夜景も知っている。赤ちょうちんのほの

かなあかりも好めば、ネオンまたたく繁華街にも心引かれるのである。我々にとって快ちよく適切な光と陰による環境づくりとは何か。これが今、多くの光を得ることができた我々に与えられたテーマである。

環境に関わる事柄は、誰がどの範囲においてどう利害をもつかで考え方も対応も多様化する。光環境も同様である。より具体的で実現可能な方法は、地域レベルで考えトータルバランスを創出していくことだろう。前述したが、地域特性を生かしたマスタープランづくりが必要となる。

地域の中で明るい所、きらめく地区、しっとりとした暗さのゾーンなどの「光の質」づくりを行い、その地域らしさを光（或いは陰）によって具現化していくことが、ライトスケープ（光と陰の風景）である。そして、先人達が光の工夫の中で常に失わなかった美への探求心をライトスケープ作りの中にも見い出したいものである。

近頃、ライトアップを光公害に結びつけて語られるケースを耳にすることがある。或る都市の夜景を数時間にわたって観察したことがあるが、圧倒的な量の光はオフィス、家々からの窓から漏れるものであり、街路灯そして通行する車のヘッドライトも川の流れのごとくになっており、深夜が近づくにつれ、その量は減り暗さを増していくのが明確に見てとれた。また一方で、ライトアップなどの景観照明の光は前述のものに比べ、極めて少ないことも解かった。

ライトアップを問題視するなら、それは総体としてではなく個別のデザイン、手法を論じるべきである。何故なら唯、明るく照らしてあげているだけの方法が依然として多すぎる。建造物の特徴を生かし、スパイスの効いた演出手法や無駄な光を極力抑えたハード面での工夫を積極的に講じている例はまだまだ少ないということも事実である。

4. あとがき

美しい星空を眺めたい人、大切にしたい街もあれば、美しく広がる街の灯を楽しみたい人、夜景を誇る街もある。その双方を両立させたいと切望する人々もいる。地域にとって何が大切で、空間的にも時間的にもバランスのとれた「その場らしさ」のあるライトスケープを創り出していくことが今まさに求められている。

また、屋外照明は夜間の余剰電力設備の有効利用であることは周知の事実であるが、貴重なエネルギーは大切に使用われなくてはならない。深夜までガラガラしているガソリンスタンドや場を選ばぬ看板照明、強力な光を放つゴルフ場のナイター設備などはエネルギー消費の問題としても勿論のこと、景観形成の点からも由々しき問題である。これは、ガソリンスタンドの照明や看板照明の存在自体が問題なのではなく、ガラガラとしていることや場を選ばないこと、強すぎるものが問題なのである。そういった観点からも光の質と量を街角的なレベルで見直していくことが総論的な議論よりも具体性があると思える。